

漁獲シナリオ等の検討について

令和6年12月23日(月)

資源管理方針に関する検討会(第6回)
～スルメイカ全系群～

水産庁

第5回資源管理方針に関する検討会の指摘事項

【第6回資源管理方針に関する検討会で御説明する事項】

- 1 令和6年度資源評価を踏まえ、全期間のデータを使用した再生産関係に基づく目標管理基準値の案、近年の低加入を反映した将来予測に基づく漁獲シナリオの案を示す。
- 2 単年生の資源ということもあり、海洋環境等の条件が整えば再生産が成功し、近年の低加入を反映した将来予測を上回る加入が生じる可能性があることを踏まえ、そのような加入が発生する可能性も想定したTAC設定の案や運用の案を示す。

【今後、中長期的課題として取り組んでいく事項】

- 1 資源評価に関連し、周辺国のスルメイカの関係者との情報・意見の交換を進め、海洋環境の変化も踏まえた資源評価の実現に向けて取り組む。
- 2 系群別の管理の実現可能性について検討をしていく。
- 3 管理に係る周辺諸国との連携強化に向けて取り組むとともに、可能な範囲でその状況・進捗等に関してステークホルダーに情報共有していく。

資源管理目標の案 (全期間のデータを使用した再生産関係に基づき計算したもの)

- 使用するデータが更新された結果、**秋季発生系群**の目標管理基準値、限界管理基準値及び禁漁水準値の案は、いずれも現行のそれぞれの値を**下回る**。
- 使用するデータが更新された結果、**冬季発生系群**の目標管理基準値、限界管理基準値及び禁漁水準値の案は、いずれも現行のそれぞれの値を**上回る**。

	秋季発生系群	冬季発生系群
目標管理基準値(案) =MSYを達成するために維持・回復させるべき目標となる親魚量	25.5万トン (32.9万トン)	25.5万トン (23.4万トン)
限界管理基準値(案) (Limit Reference Point: LRP) =下回ってはいけない資源水準の値。 秋季発生系群:MSYの75%の漁獲量が得られる親魚量 冬季発生系群:MSYの85%の漁獲量が得られる親魚量	12.3万トン (18.9万トン)	14.5万トン (13.2万トン)
禁漁水準値(案) =秋季発生系群:MSYの10%の漁獲量が得られる親魚量 冬季発生系群:MSYの15%の漁獲量が得られる親魚量	0.9万トン (3.0万トン)	1.6万トン (1.4万トン)

注: 括弧内赤字は現行の基準値等の数値

秋季発生系群：目標管理基準値（案）を上回る確率と2025年の漁獲量

- ベースケース・シナリオにおいて、10年後に50%以上の確率で目標管理基準値(案)を上回るのは、「 $\beta = 0.35$ 」以下の場合
- 「 $\beta = 0.35$ 」の場合、2025年の漁獲量(=ABC)は1.6万トン
- また、「 $\beta = 0.35$ 」の場合、2025年の加入について、ベースケース・シナリオと異なる条件を想定したシナリオ(シナリオ1～3)における2025年の漁獲量(=ABC)は、シナリオ1:2.0万トン、シナリオ2:2.6万トン、シナリオ3:3.4万トン

表1. 将来の平均親魚量 (万トン)

β	2024年漁期に親魚量が目標管理基準値案 (25.5万トン) を上回る確率												2029年漁期に親魚量が限界管理基準値案 (12.3万トン) を上回る確率	
	2023	2024	2025	2026	2027	2028	2029	2030	2031	2032	2033	2034		
0.40			11.0	14.6	16.7	17.7	17.9	21.3	24.6	26.9	28.2	29.4	47%	48%
0.35			11.2	15.1	17.6	18.8	19.2	23.1	26.9	29.5	30.9	32.3	51%	54%
0.30	9.0	6.5	11.3	15.6	18.4	20.1	20.7	25.1	29.2	32.2	33.7	35.0	56%	58%
0.25			11.5	16.1	19.3	21.3	22.2	27.1	31.7	34.8	36.3	37.6	61%	62%
0.20			11.7	16.7	20.3	22.7	23.8	29.2	34.1	37.4	38.9	40.1	65%	65%
現状の漁獲圧			9.9	13.0	15.3	16.9	17.7	21.8	25.7	28.6	30.3	31.7	52%	58%

表2. 将来の平均漁獲量 (万トン)

β	2023	2024	2025	2026	2027	2028	2029	2030	2031	2032	2033	2034
0.40			1.8	3.4	4.3	4.7	4.8	5.7	6.7	7.5	7.9	8.0
0.35			1.6	3.1	3.9	4.4	4.6	5.4	6.4	7.2	7.6	7.7
0.30	2.8	2.0	1.4	2.7	3.5	4.0	4.2	5.0	5.9	6.7	7.1	7.1
0.25			1.1	2.3	3.1	3.5	3.8	4.5	5.4	6.0	6.4	6.4
0.20			0.9	1.9	2.6	3.0	3.2	3.9	4.6	5.2	5.5	5.4
現状の漁獲圧			3.3	4.3	5.1	5.6	5.9	7.3	8.6	9.6	10.1	10.6

ベースケース・シナリオ: 直近の将来は、近年の低い加入が継続し、その後、加入が徐々に回復すると仮定(バックワード・リサンプリング)

シナリオ1: 2025年については、ベバートン・ホルト型の再生産関係による加入を想定

シナリオ2: 2025年については、過去に発生した、低加入の期間中の「高い加入」を想定

シナリオ3: 2025年については、ベバートン・ホルト型の再生産関係の下で信頼区間90%の範囲の上限値の加入を想定

冬季発生系群：目標管理基準値（案）を上回る確率と2025年の漁獲量

- ベースケース・シナリオにおいて、10年後に50%以上の確率で目標管理基準値(案)を上回るのは、「 $\beta = 0.05$ 」以下の場合
- 「 $\beta = 0.05$ 」の場合、2025年の平均漁獲量(=ABC)は0.1万トン
- また、「 $\beta = 0.05$ 」の場合、2025年の加入について、ベースケース・シナリオと異なる条件を想定したシナリオ(シナリオ1～3)における2025年の平均漁獲量(=ABC)は、シナリオ1:0.1万トン、シナリオ2:0.1万トン、シナリオ3:0.2万トン

表1. 将来の平均親魚量 (万トン)

β	2024年漁期に親魚量が目標管理基準値案 (25.5万トン) を上回る確率												2029年漁期に親魚量が限界管理基準値案 (14.5万トン) を上回る確率	
	2023	2024	2025	2026	2027	2028	2029	2030	2031	2032	2033	2034		
0.20			8.0	10.7	13.3	15.7	17.5	19.3	20.8	21.9	22.8	23.8	52%	38%
0.15			8.1	10.9	13.6	16.2	18.3	20.3	21.9	23.1	24.1	25.1	55%	42%
0.10			8.1	11.1	14.0	16.8	19.0	21.2	23.0	24.4	25.5	26.6	58%	46%
0.05	4.2	5.7	8.2	11.2	14.3	17.4	19.9	22.2	24.2	25.7	26.9	28.1	61%	52%
0.00			8.2	11.4	14.7	18.0	20.7	23.3	25.5	27.1	28.4	29.7	63%	57%
現状の漁獲圧			6.0	6.3	6.5	6.6	6.7	6.8	6.9	7.0	7.0	7.2	7%	0%

表2. 将来の平均漁獲量 (万トン)

β	2023	2024	2025	2026	2027	2028	2029	2030	2031	2032	2033	2034
0.20			0.3	0.6	1.0	1.2	1.5	1.7	1.9	2.0	2.1	2.2
0.15			0.2	0.5	0.7	1.0	1.2	1.3	1.5	1.6	1.7	1.7
0.10			0.1	0.3	0.5	0.7	0.8	0.9	1.0	1.1	1.2	1.2
0.05	1.4	2.4	0.1	0.2	0.3	0.3	0.4	0.5	0.5	0.6	0.6	0.6
0.00			0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0
現状の漁獲圧			3.0	3.1	3.2	3.3	3.3	3.4	3.5	3.5	3.5	3.6

ベースケース・シナリオ: 直近の将来は、近年の低い加入が継続し、その後、加入が徐々に回復すると仮定(バックワード・リサンプリング)

シナリオ1: 2025年については、ベバートン・ホルト型の再生産関係による加入を想定

シナリオ2: 2025年については、過去に発生した、低加入の期間中の「高い加入」を想定

シナリオ3: 2025年については、ベバートン・ホルト型の再生産関係の下で信頼区間90%の範囲の上限値の加入を想定

漁獲シナリオ、TAC、留保の案（1）

- 2025年の資源量と、漁獲シナリオと2025年の親魚量から導かれる漁獲圧力から系群ごとのABCを算定し、合計値の6割（我が国が最大の割合を有していた2007年当時の数字）をTACとする。
- ベースケース・シナリオを採用した場合、2025年のTACは1.02万トンになる（選択肢A）。
- 2025年の加入について、ベースケース・シナリオと異なる条件を想定した漁獲シナリオを採用した場合、2025年のTACは1.62万トン（選択肢B）、2.16万トン（選択肢C）となる。
- 当初に配分する数量は、ベースケース・シナリオを採用した場合の2025年のTACとなる1.02万トンとし、TACとの差分を国の留保とする。

		選択肢A (ベースケース・シナリオ)	選択肢B (シナリオ2)	選択肢C (シナリオ3)
目標管理基準値(案)		<ul style="list-style-type: none"> ● 秋季発生系群: 25.5万トン ● 冬季発生系群: 25.5万トン 		
漁獲圧力の調整係数(β)		10年後に目標管理基準値(案)を50%以上の確率で達成する β を選択 (秋季発生系群は0.35、冬季発生系群は0.05)		
加入の想定	測 予 来 将	近年の低加入が継続したのち、加入が徐々に回復すると仮定(バックワード・リサンプリング)		
	単年度ベース	—	2025年については、過去に発生した、低加入の期間中の「高い加入」を想定	2025年については、再生産関係の下での90%の信頼区間の上限の加入を想定
TAC		1.02万トン	1.62万トン	2.16万トン
(うち当初配分)		1.02万トン	1.02万トン	1.02万トン
(うち留保)		なし	0.6万トン	1.14万トン

「暫定管理基準値」に基づく漁獲シナリオ案の検討

前ページの選択肢A～Cに加え、

- ① 今回、いずれの系群についても親魚量が限界管理基準値(案)を下回り、資源再建計画の対象となること(注:これまで秋季発生系群は非対象)
- ② 当面の漁獲シナリオを検討するにあたり、近年の低加入が継続することを前提とした場合、全期間のデータを使用した再生産関係に基づく目標管理基準値(案)は、高すぎると考えられること
(※低加入が継続することを前提とした目標試算【(参考資料1)第5回SH会合資料4(2ページ及び4ページ抜粋)】参照)

から、資源再建計画の下、資源管理基本方針別紙1(資源再建計画の策定方法)の2に規定される「暫定管理基準値」として限界管理基準値(案)を用いた漁獲シナリオ案も検討する。

秋季発生系群：暫定管理基準値を上回る確率と2025年の漁獲量

- ベースケース・シナリオにおいて、10年後に50%以上の確率で暫定管理基準値(=限界管理基準値(案))を上回るのは、「 $\beta = 0.65$ 」以下の場合
- 「 $\beta = 0.65$ 」の場合、2025年の平均漁獲量(=ABC)は2.6万トン
- また、「 $\beta = 0.65$ 」の場合、2025年の加入について、ベースケース・シナリオと異なる条件を想定したシナリオ(シナリオ1～3)における2025年の平均漁獲量(=ABC)は、シナリオ1:3.8万トン、シナリオ2:4.6万トン、シナリオ3:6.1万トン

■ 暫定管理基準値を上回る確率

β	2024	2025	2026	2027	2028	2029	2030	2031	2032	2033	2034
1.00		20	27	26	23	21	24	26	28	28	29
0.95		20	27	27	24	22	26	28	30	30	32
0.90		20	28	28	26	23	27	30	32	33	34
0.85		20	29	29	27	25	29	32	34	35	37
0.80		20	30	30	28	26	31	34	37	38	40
0.75		20	30	31	30	28	33	37	40	41	43
0.70		20	31	32	32	30	36	41	43	45	46
0.65		20	32	34	33	32	40	45	48	49	50
0.60		20	33	35	36	34	43	49	52	52	54
0.55		20	34	37	38	37	47	53	55	56	57
0.50		20	35	39	40	40	50	56	59	59	61
0.45		20	35	41	43	43	54	60	63	63	64
0.40		20	36	43	46	47	58	64	67	66	68
0.35		20	38	46	50	51	63	70	71	71	72
0.30		20	40	49	53	56	68	74	76	76	76
0.25		20	43	53	58	61	73	79	80	80	80
0.20		20	45	56	62	65	78	82	83	83	83
0.15		20	48	59	67	70	82	86	87	86	87
0.10		20	52	63	71	75	86	89	90	89	90
0.05		20	55	68	75	79	90	91	92	93	93
0.00		20	56	73	78	84	93	94	95	95	96
現状の漁獲圧		20	36	44	48	52	66	75	78	79	79

■ 将来の平均漁獲量

β	2024	2025	2026	2027	2028	2029	2030	2031	2032	2033	2034
1.00		3.7	6.0	6.1	5.7	5.2	5.7	6.3	6.7	7.0	7.0
0.95		3.5	5.9	6.1	5.7	5.3	5.8	6.4	6.9	7.3	7.2
0.90		3.4	5.7	6.0	5.7	5.3	5.9	6.6	7.1	7.5	7.5
0.85		3.3	5.6	5.9	5.7	5.4	6.0	6.7	7.3	7.6	7.7
0.80		3.1	5.4	5.8	5.7	5.4	6.0	6.8	7.4	7.8	8.0
0.75		3.0	5.2	5.7	5.7	5.4	6.1	6.9	7.5	8.0	8.2
0.70		2.8	5.0	5.6	5.6	5.4	6.1	7.0	7.8	8.2	8.4
0.65		2.6	4.8	5.4	5.6	5.4	6.2	7.1	8.0	8.5	8.6
0.60		2.5	4.6	5.3	5.5	5.4	6.2	7.2	8.0	8.6	8.7
0.55		2.3	4.3	5.1	5.3	5.3	6.1	7.2	8.0	8.6	8.6
0.50		2.1	4.0	4.8	5.2	5.2	6.0	7.1	7.9	8.5	8.5
0.45		1.9	3.7	4.6	4.9	5.1	5.9	6.9	7.8	8.2	8.3
0.40		1.8	3.4	4.3	4.7	4.8	5.7	6.7	7.5	7.9	8.0
0.35		1.6	3.1	3.9	4.4	4.6	5.4	6.4	7.2	7.6	7.7
0.30		1.4	2.7	3.5	4.0	4.2	5.0	5.9	6.7	7.1	7.1
0.25		1.1	2.3	3.1	3.5	3.8	4.5	5.4	6.0	6.4	6.4
0.20		0.9	1.9	2.6	3.0	3.2	3.9	4.6	5.2	5.5	5.4
0.15		0.7	1.5	2.0	2.4	2.6	3.2	3.7	4.1	4.3	4.3
0.10		0.5	1.0	1.4	1.7	1.8	2.3	2.6	2.9	3.1	3.1
0.05		0.2	0.5	0.7	0.9	1.0	1.2	1.4	1.5	1.6	1.6
0.00		0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0
現状の漁獲圧		3.3	4.3	5.1	5.6	5.9	7.3	8.6	9.6	10.1	10.6

ベースケース・シナリオ: 直近の将来は、近年の低い加入が継続し、その後、加入が徐々に回復すると仮定(バックワード・リサンプリング)

シナリオ1: 2025年については、ベバートン・ホルト型の再生産関係による加入を想定

シナリオ2: 2025年については、過去に発生した、低加入の期間中の「高い加入」を想定

シナリオ3: 2025年については、ベバートン・ホルト型の再生産関係の下で信頼区間90%の範囲の上限値の加入を想定

冬季発生系群：暫定管理基準値を上回る確率と2025年の漁獲量

- ベースケース・シナリオにおいて、10年後に50%以上の確率で暫定管理基準値(=限界管理基準値(案))を上回るのは、「 $\beta = 0.50$ 」以下の場合
- 「 $\beta = 0.50$ 」の場合、2025年の平均漁獲量(=ABC)は0.6万トン
- また、「 $\beta = 0.50$ 」の場合、2025年の加入について、ベースケース・シナリオと異なる条件を想定したシナリオ(シナリオ1～3)における2025年の平均漁獲量(=ABC)は、シナリオ1:0.8万トン、シナリオ2:1.4万トン、シナリオ3:1.7万トン

■ 暫定管理基準値を上回る確率

β	2024	2025	2026	2027	2028	2029	2030	2031	2032	2033	2034
1.00		0	15	18	21	22	22	22	22	23	24
0.95		0	16	19	22	23	23	23	24	25	26
0.90		0	17	20	23	24	25	25	26	27	28
0.85		0	18	21	24	25	26	28	29	29	31
0.80		0	19	21	25	27	28	30	31	32	33
0.75		0	21	22	26	28	30	32	34	34	36
0.70		0	21	23	27	30	32	34	37	37	39
0.65		0	23	24	29	32	34	37	39	40	43
0.60		0	24	24	30	33	37	40	42	44	46
0.55		0	25	25	32	35	39	43	45	47	49
0.50	0	0	26	26	33	37	42	46	48	51	53
0.45		0	28	27	35	40	45	50	52	55	57
0.40		0	29	28	37	42	48	53	55	59	61
0.35		0	30	29	39	45	51	56	59	63	65
0.30		0	31	30	41	47	54	60	63	66	70
0.25		0	31	31	43	50	57	64	67	70	74
0.20		0	32	33	46	52	60	67	71	74	77
0.15		0	32	35	48	55	63	71	75	78	81
0.10		0	32	38	49	58	66	74	78	81	84
0.05		0	32	40	51	61	70	77	82	85	87
0.00		0	32	42	53	63	73	81	85	88	90
現状の漁獲圧		0	0	3	8	7	8	8	8	8	9

■ 将来の平均漁獲量

β	2024	2025	2026	2027	2028	2029	2030	2031	2032	2033	2034
1.00		1.2	2.3	3.1	3.4	3.6	3.7	4.0	4.1	4.1	4.2
0.95		1.2	2.2	3.1	3.3	3.6	3.7	4.0	4.1	4.2	4.3
0.90		1.1	2.2	3.0	3.3	3.6	3.7	4.0	4.1	4.2	4.3
0.85		1.0	2.1	2.9	3.2	3.5	3.7	3.9	4.1	4.2	4.3
0.80		1.0	2.0	2.8	3.1	3.4	3.6	3.9	4.1	4.2	4.3
0.75		0.9	1.9	2.7	3.0	3.4	3.6	3.9	4.0	4.1	4.3
0.70		0.9	1.8	2.6	2.9	3.3	3.5	3.8	4.0	4.1	4.2
0.65		0.8	1.7	2.4	2.8	3.2	3.4	3.7	3.9	4.0	4.2
0.60		0.7	1.6	2.3	2.7	3.1	3.3	3.6	3.8	4.0	4.1
0.55		0.7	1.5	2.2	2.6	3.0	3.2	3.5	3.7	3.9	4.0
0.50	2.4	0.6	1.4	2.0	2.4	2.8	3.1	3.4	3.6	3.7	3.9
0.45		0.6	1.2	1.9	2.3	2.6	2.9	3.2	3.4	3.6	3.7
0.40		0.5	1.1	1.7	2.1	2.5	2.7	3.0	3.2	3.3	3.5
0.35		0.4	1.0	1.5	1.9	2.3	2.5	2.8	3.0	3.1	3.2
0.30		0.4	0.9	1.4	1.7	2.0	2.2	2.5	2.7	2.8	2.9
0.25		0.3	0.7	1.2	1.5	1.8	2.0	2.2	2.4	2.5	2.6
0.20		0.3	0.6	1.0	1.2	1.5	1.7	1.9	2.0	2.1	2.2
0.15		0.2	0.5	0.7	1.0	1.2	1.3	1.5	1.6	1.7	1.7
0.10		0.1	0.3	0.5	0.7	0.8	0.9	1.0	1.1	1.2	1.2
0.05		0.1	0.2	0.3	0.3	0.4	0.5	0.5	0.6	0.6	0.6
0.00		0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0
現状の漁獲圧		3.0	3.1	3.2	3.3	3.3	3.4	3.5	3.5	3.5	3.6

■ **ベースケース・シナリオ**: 直近の将来は、近年の低い加入が継続し、その後、加入が徐々に回復すると仮定(バックワード・リサンプリング)

■ **シナリオ1**: 2025年については、ベバートン・ホルト型の再生産関係による加入を想定

■ **シナリオ2**: 2025年については、過去に発生した、低加入の期間中の「高い加入」を想定

■ **シナリオ3**: 2025年については、ベバートン・ホルト型の再生産関係の下で信頼区間90%の範囲の上限値の加入を想定

漁獲シナリオ、TAC、留保の案（2）

- 2025年の資源量と、漁獲シナリオと2025年の親魚量から導かれる漁獲圧力から系群ごとのABCを算定し、合計値の6割をTACとする。
- ベースケース・シナリオを採用した場合、2025年のTACは1.92万トンになる。TACの40%【P】を国の留保とする（選択肢D）。
- 2025年の加入について、過去に発生した、低加入の期間中の「高い加入」を想定した漁獲シナリオを採用した場合、2025年のTACは3.60万トンとなる。
- 当初に配分する数量は、ベースケース・シナリオを採用した場合の2025年のTACとなる1.92万トンとし、TACとの差分を国の留保とする（選択肢E）。

		選択肢D (暫定管理基準値+ベースケース・シナリオ)	選択肢E (暫定管理基準値+シナリオ2)
目標管理基準値(案)		秋季発生系群:25.5万トン、冬季発生系群:25.5万トン	
暫定管理基準値 (限界管理基準値(案))		秋季発生系群:12.3万トン、冬季発生系群:14.5万トン	
調整係数(β)		10年後に暫定管理基準値を50%以上の確率で上回る β を選択 (秋季発生系群は0.65、冬季発生系群は0.50)	
加入の想定	予測	近年の低加入が継続したのち、加入が徐々に回復すると仮定(バックワードリサンプリング)	
	単年度	—	2025年については、過去に発生した、低加入の期間中の「高い加入」を想定
TAC		1.92万トン	3.60万トン
(うち当初配分)		1.15万トン (TACの40%を留保とする場合)	1.92万トン
(うち留保)		0.77万トン	1.68万トン

総括表（1）

R7管理年度で決定した選択肢は、

- ① 選択肢A、Dの場合はベース・ケースシナリオを採用しているため、資源管理基本方針に従い**5年後（R11管理年度）**に、
- ② 選択肢B、C、Eの場合はベースケース・シナリオを採用しないことで生じるリスクの可能性を鑑みて**3年後（R9管理年度）**に見直すこととしたい。

選択肢	考え方	R7管理年度 TAC (万トン)	うち 当初配分 (万トン)	うち留保 (万トン)	見直し
A	<ul style="list-style-type: none"> ■ 目標管理基準値(案) ：秋季発生系群25.5万トン、冬季発生系群25.5万トン ■ 調整係数：秋季発生系群0.35、冬季発生系群0.05 ■ 加入の仮定：近年の低加入が継続（バックワードリサンプリング） 	1.02	1.02	0	R11
B	<ul style="list-style-type: none"> ■ 目標管理基準値(案) ：秋季発生系群25.5万トン、冬季発生系群25.5万トン ■ 調整係数：秋季発生系群0.35、冬季発生系群0.05 ■ 加入の仮定：2025年については、過去に発生した、低加入の期間中の「高い加入」を想定 	1.62	1.02	0.6	R9
C	<ul style="list-style-type: none"> ■ 目標管理基準値(案) ：秋季発生系群25.5万トン、冬季発生系群25.5万トン ■ 調整係数：秋季発生系群0.35、冬季発生系群0.05 ■ 加入の仮定 ：2025年については、ベバートン・ホルト型の再生産関係の下で実際の親魚量と加入量の90%が含まれると推定される範囲の上限の加入を想定 	2.16	1.02	1.14	R9

総括表（2）

選択肢	考え方	R7管理年度 TAC (万トン)	うち 当初配分 (万トン)	うち留保 (万トン)	見直し
D	<ul style="list-style-type: none"> ■ 目標管理基準値(案) ： 秋季発生系群25.5万トン、冬季発生系群25.5万トン ■ 暫定管理基準値 ： 限界管理基準値（案）（秋季発生系群12.3万トン、冬季発生系群14.5万トン） ■ 調整係数：秋季発生系群0.65、冬季発生系群0.50 ■ 加入の仮定 ： 近年の低加入が継続（バックワードリサンプリング） 	1.92	1.15	0.77 (TACの 40%の場 合)	R11
E	<ul style="list-style-type: none"> ■ 目標管理基準値(案) ： 秋季発生系群25.5万トン、冬季発生系群25.5万トン ■ 暫定管理基準値 ： 限界管理基準値（案）（秋季発生系群12.3万トン、冬季発生系群14.5万トン） ■ 調整係数：秋季発生系群0.65、冬季発生系群0.50 ■ 加入の仮定 ： 2025年については、過去に発生した、低加入の期間中の「高い加入」を想定 	3.60	1.92	1.68	R9

留保からの配分ルールについて

基本的ルール

- 国の留保分については、大臣管理区分及び各都道府県（数量を明示したものに限る。）とともに、以下の方法によって配分を行う。
 - ・ 75%ルール（参考資料2参照）
 - ・ 水産政策審議会資源管理分科会へ諮問を行った上での配分
- ただし、国の留保分が不足すると見込まれる場合には、この限りでない。



漁獲シナリオの選択肢に応じたルール

- **2025年に、ベースケース・シナリオよりも高い加入が発生すること想定する選択肢**では、留保からの配分について、一定の発動要件を設けることが妥当（例：各管理区分／全体の消化率が〇%を超える／超えることが見込まれる場合 等）。
- また、**留保の数量が少ない選択肢**では、
 - ✓ 1つの管理区分への留保からの配分の上限（例：各管理区分の当初配分の〇倍まで）、
 - ✓ 一定の時期までの留保からの配分の上限（例：〇月までの留保からの配分の総量は、留保全体の〇割まで）を設定することが妥当。

 本日のステークホルダー会合で管理目標と漁獲シナリオを取りまとめ、TACの内訳（当初配分＋留保）と留保からの配分ルールは、来年1月下旬のTAC意見交換会に向けて数量明示配分の大管管理区分及び道県の関係者と調整（※各選択肢の留保からの配分ルールのイメージは次のスライドを参照）

選択肢ごとの留保からの配分ルール（イメージ）

選択肢	考え方	R7管理 年度TAC (万トン)	うち 当初配分 (万トン)	うち留保 (万トン)	留保からの 配分ルール
A	<ul style="list-style-type: none"> ■目標管理基準値(案) ：秋季発生系群25.5万トン、冬季発生系群25.5万トン ■加入の仮定 ：近年の低加入が継続（バックワードリサンプリング） 	1.02	1.02	0	(なし)
B	<ul style="list-style-type: none"> ■目標管理基準値(案) ：秋季発生系群25.5万トン、冬季発生系群25.5万トン ■加入の仮定 ：2025年については、過去に発生した、低加入の期間中の「高い加入」を想定 	1.62	1.02	0.6	①基本ルール ②一定の発動要件 ③1つの管理区分又は一定の時期までの留保からの配分量の上限の設定が必要。
C	<ul style="list-style-type: none"> ■目標管理基準値(案) ：秋季発生系群25.5万トン、冬季発生系群25.5万トン ■加入の仮定 ：2025年については、ベバートン・ホルト型の再生産関係の下で実際の親魚量と加入量の90%が含まれると推定される範囲の上限の加入を想定 	2.16	1.02	1.14	①基本ルール ②一定の発動要件 （選択肢Bの要件+追加要件）
D	<ul style="list-style-type: none"> ■暫定管理基準値 ：限界管理基準値（案）（秋季発生系群12.3万トン、冬季発生系群14.5万トン） ■加入の仮定 ：近年の低加入が継続（バックワードリサンプリング） 	1.92	1.15	0.77 (TACの40%の場合)	①基本ルール ②1つの管理区分又は一定の時期までの留保からの配分量の上限の設定が必要
E	<ul style="list-style-type: none"> ■暫定管理基準値 ：限界管理基準値（案）（秋季発生系群12.3万トン、冬季発生系群14.5万トン） ■加入の仮定 ：2025年については、過去に発生した、低加入の期間中の「高い加入」を想定 	3.60	1.92	1.68	①基本ルール ②一定の発動要件 （加入の仮定はBと同じだが、目標が異なることを踏まえた要件にする必要）

今後のスケジュール（案）

令和6年 12月23日	第6回ステークホルダー会合 (資源管理の目標、漁獲シナリオの取りまとめ)
令和7年 1月上旬	資源管理基本方針の一部変更の案に係るパブリック・コメント実施 (資源管理の目標及び漁獲シナリオ)
＜TACの当初配分(留保の数量)案、留保からの配分ルール案の調整＞	
1月下旬	TAC意見交換会 (TACの当初配分案、留保からの配分ルール案を提示し説明)
2月上旬	水産政策審議会資源管理分科会 (資源管理基本方針の一部変更の案、TACの当初配分案を了承)
2月上中旬	資源管理基本方針の一部変更の案に係るパブリック・コメント実施 (留保からの配分ルール案)
3月上中旬	水産政策審議会資源管理分科会 (資源管理基本方針の一部変更の案を了承)
4月1日～	令和7管理年度開始